

私好みの貴方あなたでございます。

目次

私好みの貴方あなたでございます。

5

蜜月みつげつはマイクロビキニで

273

私好みの貴方あなたでございます。

十一月五日、月曜日——

二十四歳の誕生日に、花嫁修業をするよう母親に命じられました。

……今時、時代錯誤な話だと思いませんか？

私、野々宮織江。

とある企業の地方支店に勤める、ただの会社員。

特に良いところのお嬢様とかそんなのではない、ごく普通のどこにでもいる平凡な女子である。少なくとも自分ではそう思っている。けれど母親からすると「平凡な女子」というだけでは物足りないらしい。

「お母さんがあなたの年の頃にはね、とうに結婚して、お姉ちゃんを産んでいました。そのお姉ちゃんだって——」

いつもの小言。この流れで姉を引き合いに出すのもまた、いつものことだった。

姉の陽子はご近所でも有名な才色兼備。国立四大卒業後は一流企業に就職し、充実した社会人

生活を満喫した後、エリート社員と結婚するのではないか。誰もがそう予想していたのだが、意外や意外、在学中から付き合っていた三歳年上の恋人にプロポーズをされるとあっさり結婚してしまった。

それが二年前の春のこと。私とは年子だから、当時姉は二十二歳。こうして彼女は若き花嫁となったのだ。

現在は旦那様の実家近くに建つ高級マンションに暮らし、専業主婦として日々を謳歌している。

当初姉が一流企業に勤めることを期待していた母だったが、最終目標である「幸せな結婚」が少し早まっただけで結果的には自分の理想どおりだと、今では手放して喜んでいいる。

「お姉ちゃんの旦那様は、海外出張も多い一流商社にお勤めだから、伴侶のサポートが必要なのよ。それにお給料がいいから、奥さんがあくせく働く必要なんてないしね」

ホホホ……と、勝ち誇ったように高笑いをする。

まるで、姉の暮らしが安泰なのは自分の手柄だとしても言わんばかりの態度であるが、実際それを目指して育ててきたのだから、そう言えないこともない。

女の幸せは夫となる男の甲斐性で決まるのよ、と口癖のように言ってきた母は、姉や私が物心つく前からずーっと働き続けている。私は最近まで共稼ぎは好きでやっていることだと勘違いしていたのだが、実は父の薄給を補うために仕方なく、だったらしい。

いつも元気に動き回る母はいいきとして見えたのだが、本心は違っていたということなのだろうか。

「家でのんびりしたかったわよ。働いて家事やって子育てして……どれだけ大変なことか考えてごらん。いい？ お姉ちゃんを持つて生まれた器量と自分磨きで、今の幸せを勝ち取った。あんたはこれといった特技も無いし、一年中春みたいにぼーっとしてるんだから、若いうちに教養を身につけてレベルの高い男をゲットするしか幸せになる道はないのよ。なんといつても、二十四歳っていうのは、女性の結婚適齢期最後の年なんですからね」

今時そんなことを信じている母に頭痛を覚える。だって、周囲の同年代を見渡せば男も女も独身ばかり。それが普通で、現代の常識なのだ。

だが、思い込みの強い母にそんな正論は通じない。

私は無駄な反論はせず、いつもの小言をいつものごとく聞き流そうとしたが、母の言葉はまだ終わらなかった。

「そこで、まずは女性のたしなみの基本、お茶とお花から。お母さんの古いお友達の……えっと、ご親戚の方が、茶華道のお教室を開いてるから、すぐに行つてご挨拶してきなさい」

「は？」

いきなり何を言いだすのだろう。ぼかんと見返す私に、母の大真面目な顔が迫る。

「夜の十時に娘がお伺いしますと、約束してあります」

月初めの月曜日。時計を見れば九時二十分。

残業して帰ったばかりで、疲れてるんですけど。

明日はいつものように、朝七時に出勤するんですけど。

というか、そもそも夜の十時に伺うなんて、非常識では？

そんな言葉がぐるぐると頭の中を巡ったが、口からは何の言葉もでてこなかった。とりあえず、

ぼーっとしたまま、目の前の夕飯をぼそぼそと食べ始める。

「ほら、桃田町二丁目の光明寺っていうお寺さんの前に、古いお屋敷があるでしょう。あのお屋敷のご主人が織江の先生になってくださる浦島章太郎さん。あちこちの会社やお店に土地を貸してる地主さんで、ええとあとは……ふ、ふお？ 何とかっていう街の一等地の喫茶店だかレストランだかを経営する、やり手の経営者でもあるんですって」

母の目がキラキラしてきた。やり手、経営者、という言葉は、彼女の好物である。

「その上、京都に宗家のある有名な茶道流派で、準教授の許状を得られた師範でもいらつしやるのよ。その浦島先生が、毎週木曜日の夜八時から十時まで、茶華道を稽古してくださるそうなの」

「はあ……」

桃田町というのは、私が小学三年生まで住んでいた町で、ここからそれほど遠くない。車なら十五分ほどの距離である。母は知人が多いこともあり、よく行く場所だ。この前も、『秋の農業祭』という毎年の行事に誘われ出かけていた。ちなみに私もその時、運転手を兼ねて付き合わされている。

きつと、その友達関係の伝手だろうが、それにしても数から棒な話だと思う。

「でも、今からなんて失礼じゃないの……」

「だから、夜は十時までお教室を開いてるから大丈夫なのっ」

ささやかな抵抗は、大きな声に一蹴される。今日の母は、いつにもまして迫力たつぷりで、鼻息も荒いような気がする。

急な話に未だ思考はついていけないが、この状態の母に何を言っても無駄だろう。

「さあ、約束してあるんだから、ちゃんとしてちょうだい。遅れるほうが失礼よ！」

とりあえず抵抗を諦めて、急かされるままに夕飯を口にかき込み、出かけるための準備をした。

歯を磨いて化粧直しをし、ふわふわしたショートボブをきちんと梳かして、用意してあったお出かけ用のワンピースに着替えさせられる。

「なんか、変だな」

ここで首を傾げるが、早く早くという母の煽りに違和感もかき消されてしまう。

「安物のナイロン靴なんて駄目よ。ほら、きれいに磨いておいたからこれを履いて行ってちょうだい」

母が玄関に揃えたのは、入社式以来靴箱に放置してあった革のパンプスである。確かにこの服には釣り合うけれど、わざわざ磨いてくれるなんてどういふことだろう。

玄関の外まで見送りに出て来た母に、箔押しされた富有柿を持たされる。

ずしりと重いそれを手土産に『浦島先生』のところへ向かうこととなった。

母親の急かし振りと用意周到さに、再び首を傾げる私。

車に乗って桃田町二丁目を目指しながら、母の言葉をあらためて考えてみる。

「えーと、木曜日の夜の八時から十時まで、その『やり手経営者』である浦島章太郎先生が教えてくださいださる、お茶とお花を、か」

二丁目の光明寺の前にあるお屋敷は知っている。

広い敷地をぐるりと囲む塀は古く、ところどころ穴が開いていた。全体的に古びた様子が不気味で、子供心にお化け屋敷のようだと思っていた。母のお使いか何かで前をとおりかかった時、穴のひとつに首を突っ込み、中を覗いてみたことがある。子供ならではの好奇心というやつだ。

『やっぱり、人が住んでたのかー』

と、驚いた記憶がある。

その屋敷に挨拶に行くことになるうとは。しかも、これまで考えてもみなかった茶華道の入門である。

「お化け屋敷に住んでる人に習うなんて……」

どういふ縁なのか知らないが、ちょっと遠慮したい気分になってきた。

それに、勢いに押されてここまで来てしまったが、やっぱり何か変だと思ふし、納得がいかない。母は、姉が早くに結婚してエリートのお嬢様におさまったのがよほど嬉しらしく、私にもあんな結婚をさせたがっている。でも私にとって結婚が最上の道だとして分かるのだらう。

確かに、私は特技も無いし、男の人との交際だって未経験に等しい。だからといって、『教養を身につけてレベルの高い男をゲットしろ』なんて、いきなり命令されるのは釈然としない。

(誰かに変なことを吹き込まれたのでは?)

辿り着いた答えはそれだった。

と同時に、運転してきた軽自動車も、浦島家屋敷前に辿り着いてしまった。

「とにかく、絶対、変だよね」

月明かりも頼りない闇の中、高木の梢が秋風に揺れ、散った枯葉がはらはらとフロントガラスに舞い降りる。嫌な予感に苛まれながら屋敷の裏手に車を回すと、空き地然としたスペースに複数の自家用車がとめてあった。

入り口脇に立つ朽ちかけた木札に『浦島茶華道教室駐車場』と筆書きされている。小学生の時に書道を習っていたので、私にも少しは分かる。これはなかなかの達筆だ。

何度かハンドルを切り返ししながら手前の一番隅っこにバック駐車をし、ハンドブレーキをぐっと引っ張ってからしばし考えてみる。

やっぱり何か企んでいるに違いない——というのが結論だった。

車を降り塀に沿って歩いて、屋敷の正面側に戻った。ところどころ穴が開いた塀は相変わらずで、修繕された様子はない。しかし街灯のもとではそんなあらも目立たず、大きな屋敷にふさわしい立派な外構えに見える。

闇に浮かび上がる門の大きさに少し怯んだが、思い切つてくぐった。

腕時計を見ると、約束の十時まであと二、三分ほどだ。母が勝手に取り付けた約束ではあるが、相手が待っているのならば遅れてはいけない。それは社会人として最低限のルール。

だが、さすがの私もだんだんと腹が立つてきた。こんなやり方はあまりにも人を馬鹿にしている。

疲れて帰宅した娘に問答無用でご挨拶に行け、茶華道を始める、だなんて。母に逆らうのは気が重いが、ここでバシッと自分の意思を示さねばと心に決めた。

門の先には石造りの階段が二段あり、そこから飛び石のアプローチが家屋へと続いていた。

母屋の玄関横に電灯が点っているもののその光は弱く、玄関全体は薄暗い。

広い庭には外灯も無く、縁側からもれる灯りが伸びびつばなしの枯れ草を照らしている。こちらも相変わらず手入れがされていない様子だ。

(こんなだらしななことで、お茶やお花を教えられるのかしら)

不信任をつのらせながら呼び鈴を押す。暫くして奥から足音が聞こえてきた。その足音は複数で、女性の笑いさざめく声も混じっている。

がらりと、勢いよく引き戸が開け放された。

「おっ、こんばんは」

張りのある声に驚いて思わずぱっと見上げると、背の高い、スポーツ選手のように体格のいい男性が立ちほだかっていた。グレーの着物に紺の帯を締めている。

(この人が、浦島章太郎先生?)

茶華道の先生というからにはもつと年配で、なぜか華奢で小柄というイメージを抱いていたから、ちよつとびっくりした。

さらにびっくりしたのは、彼と一緒に出て来た三人の女性にあつという間に取り囲まれたことだった。

「あらあ、この方が？」

「随分と若いコじゃないか。へえ、隅に置けないね、先生も」

「よかった、よかった。これで大先生もようやく極楽往生を遂げなさる」

薄暗くてはつきりとしなが、どうやら皆、中高年の女性である。それぞれがビニールで巻かれた生花を手にしている。教室の生徒さんのようである。先生と呼ばれた大男は照れくさそうに頭をかいて、「まいったなあ、いやあ本当に来てくれたんだ」などと、嬉しそうに笑っている。

(なんなんだろう、この人は。どういことなんだろう)
わけが分からずきよるきよるするばかりであるが、とにかくこの男性が「浦島先生」なのは間違いないようだ。

「それじゃあね、先生。おじやま虫はこの辺で失礼するよ」

中央に立っている六十歳くらいの女性が、浦島先生の頑丈そうな肩をぺしっと叩いて玄関を出て行った。

「ありがたい、ありがたい。なにとぞよろしくお願い申し上げます」

次に、ほぼ九十度に腰が曲がった老婦人が、額が地面に着きそうなほど深々とお辞儀をするので、私も慌てて頭を下げた。どういう訳か、なむなむと念仏を唱えながら私に手を合わせている。

「頑張つてねえ、楽しみにしておりますわん、ご結婚」

最後に、三人の中では最も若いと見られる中年女性が、意味ありげにニヤリと笑ってそう言い残し、老婦人とともに歩み去って行った。

賑やかさが消え、暗く荒れた庭に秋の虫が鳴き始める。しばらく呆然と見送っていたが、徐々に意識が戻ってきた。

「え……えっ？」

振り向くと、浦島先生が玄関の奥へ腕を広げ、身体にふさわしい大きな声で言ったのだ。

「さあ、上がってください織江さん」

(今、名前を呼んだ？ それも、苗字ではなく下の名前を。じゃなくって、その前にとんでもないことを聞いたような)

あらためて、目の前の男性を眺めた。嬉しそうにこにこして、私を見下ろしている。

(この人は、誰？)

あまりの愛想の良さに、もしかしたら自分の知っている人だろうかと急いで記憶の中の人物ファイルを検索する。が、どこにも見当たらない。玄関の灯りに照らされた顔と姿を凝視しても分らない。こんな彫りの深い、西洋人のように高い鼻梁を持った美丈夫は知り合いいはない。

絶対に、初対面のはずである。

「あ、あなたは誰ですか。一体これは、どういうことなんですか？」

うわずった声で質問すると、先生はぼかんとして広げていた腕を下げた。そして逆に訊いてきた。「分からない？」

こくこくと頷いた。全く、分からなかった。

「そういうことかあ」

がっかりしたように言われても、私にはサッパリである。

「私はただ、お茶とお花を習いなさいと母に言われてご挨拶に来たのです。母の古い知り合いの方からのご縁だと紹介されて、あなたは、その、浦島先生だと聞いています」

「うん、俺は浦島章太郎。週に一度、茶華道の教室をここで開いているが、他の日も出張講師や何かで忙しい。ちなみに年齢は三十二歳。これも知らない？」

はきはきとした喋り口調は真面目そうであり、私はびくびくしながらも素直に答える。

「はい。あ、でも、先生は地主さんでお店の経営者だというお話も聞いています。それと木曜日の夜に教室を開いているとも」

「木曜日？」

怪訝な顔にハツとする。

「あ、今日って……」

「月曜日だよ。他の曜日に教室は開いていない」

そうだ、今日は月曜日だ。なんで木曜日じゃないのにご挨拶に送り出されたのか不思議に思うべきだった。こんな単純なことに、どうして気付かなかったのだろう。

いや、それよりも、そんなことよりも――

「さ、さっきの人が言ってた、ごっつ、ご結婚って、どういう……」

「あー、いい。大体分かったよ」

夜のしじまに響く声に遮られ、びくつと身体を震わせた。

（怒ったのかな？ でも、私が悪いんじゃないのに）

「ほら、そんな重そうなものぶら下げてないで」

「きやつ」

いきなり、手にしていたお土産の富有柿を取り上げられた。と言うより、有無を言わせぬ早業で奪い取られたのだ。

「な、なにを」

「せつかく来たんだ。まあ、話だけでも聞いて行きなさい」

「はあ？ いえ、私は帰ります。もう、帰りますから！」

玄関の奥に続く廊下はシンとして薄暗く、他に人がいる気配は無い。冗談ではないと思い、私は必死に頭を振った。

「こいつは俺の好物だ。君、織江さん。ひとつ剥いてくれないか。そうしたら、帰してやる」

彼は富有柿の箱を高々と掲げ、その反対の手で私の腕をつかんだ。着物の袖から伸びる腕は日に焼けていて、手首は太く、恐ろしく頑丈そうに見える。

「ちよ、ちよっと待ってください……」

「遠慮しなくてもいいよ、この屋敷には俺しかいない」

（だから困るんです！）

玄関の中に引きずり込まれた。ものすごい力だった。

「やめてください。離してください」

必死にもがいてもびくともしない。それどころか、ますます彼の力は強くなる。

「だから、一緒に食おう。食って、話を聞いてくれたら何もしないで帰してやると言ってる。どうだ、ここで逆らってるのどどっちが良い？」

はあはあと、息を荒らげながら彼の一方的な提案を聞いた。せつかく直した化粧も髪も乱れ、目尻には涙さえ浮かんでいいる。

(どうしてこうなるの?)

自分を捕まえている見知らぬ男よりも、こんなところに私を寄越した母を、ひたすらに恨んだ。

「ほんとうに、何もしない？」

気弱な諦めの言葉に、彼はふっと力を緩め、表情もやわらげた。

「ああ、約束するよ」

腕をそっと離し、彼はくると背を向ける。さっきまでの激しさとは打って変わった静かな口調と、あっさり解放されたことに私は戸惑う。つかまれた部分はじーんと痺れているのに。

浦島先生は上り框に足をかけて家の上がり、さっさと歩いて行く。そして廊下の途中でびたりと止まると、玄關で立ちすくんだままの私を振り返り、もう一度富有柿の箱を高く掲げた。

「おいで織江。早く食いたい」

逃げようと思えば逃げられるのに。

見えない縄に捕らわれたみたいに、後について行った。

廊下から一間置いた奥の座敷に通された私は、少し待っているように言われて畳の上に正座した。先生が出て行き襖を閉めてから、それとなく室内を見回してみた。

座敷は、屋敷周りの荒れようからは考えられない、きちんと片付けられた清浄な仏間だった。びかびかに磨かれた立派な仏壇には線香が焚かれ、花もきれいに供えられている。豪快な外見のあの人の手によるものとは思えない、細やかな心遣いだ。

鴨居には、上品な面差しをした着物の男女の遺影が飾られていた。立ち上がって見上げ、彼の祖父母だろうかと推測する。仏壇の前に座ると、手を合わせて「おじやま致します」と挨拶をした。なんとなくそうしたのだが、部屋に入ってきた先生は驚いたように目をみはり、なぜか嬉しそうに笑った。

「さて、剥いてもらおうかな」

座卓の脇に戻り再び正座した私の目の前に、富有柿がひとつと果物ナイフに布巾、お皿とフォークを載せたお盆が置かれた。

濡れ布巾で手を拭うように言われて、丁寧に指一本一本の脂を取り去り気持ちよさを落とすかせる。

緊張で全身脂汗をかいている。

「先月末の農業祭に、お母上と一緒に来てただろう。俺も会場が近所なものだからあの日、散歩がてら、ぶらぶらと出かけてたんだよ。そこで、君を見かけたんだ」

柿を剥く私の手元に注目しながら、浦島章太郎三十二歳独身はにこにこ……いや、にやにや顔で話し始めた。

「今年の品評会で金賞を取った白菜の前で、ぼーっとしている君が、なんていうかこう、ね、どうにも可愛くってね。平たく言えばひと目惚れってやつだ。でも、いきなり嫁さんになってくれなんていくら俺でも恥ずかしくって言えないからねえ。どうしようかと迷っていたら、君のお母さんと連れ立って歩いているのが俺の知ってる人じゃないか。彼女、三船さんは俺の教室の生徒さんで、しかも君のお母さんとは仲が良さそう。これは天の導きだと喜んで、その日のうちに三船さんに連絡して、紹介してほしいと頼んだのさ。もし白菜の彼女が独身で俺の申し出に応えてくれるなら、花嫁修業をかねて茶華を習いに来るよう取り計らってくれないかと。どうだ？ これで話は見えただろう」

そうだったのかと、ようやくこの状況を理解したが、にわかには信じられる話ではなかった。理解をしても、納得ができない。

だって彼は、驚くようなことを言っただけのだから。

私に、ひと目惚れした？ それから、嫁さんになつてくれ!?

動揺でナイフの運びが乱れてしまう。彼のにやにやはそれを楽しんでいるからだろうか。

震える手でナイフを置くと、切り分けた柿を器に並べた。

「お待たせ致しました」

座卓を挟んで正面に座っている浦島先生の前におずおずと差し出す。先生は、着物の袖に互い違いに突っ込んでいた両腕を抜いて、すっと手を合わせた。

「いただきます！」

よく通る声で挨拶すると、果実にフォークをさくつと刺して口に含んだ。

「ん、んん」

感に堪えないといった唸り声をもらし、それから私にフォークの持ち手を向けた。

「君も食べてみる。実に美味しい」

「え、あ、はい」

同じフォークで？ と、訊く間もなく持たされる。仕方なく同じように果実を刺して、かりりとかじった。彼はじっと見守っている。

「美味いだろう」

「はい、美味しいです」

この富有柿は、母が岐阜の親戚に送ってもらったものだ。柿の選果場に勤める伯父がいるので、贈答用にと毎年取り寄せている。

「俺の好物をお土産にしてくださいさるとは、織江のお母さんは俺のことを気に入ってくれてるんだな」

——先生の好物？

嬉しそうに笑う彼に、確信した。

やはり、母は企んでいたのだ。

三船さんのことはよく知っている。いわゆるお見合いおばさんと呼ばれる顔の広い女性だ。見合いをいくつも成功させて、仲人をしているという。いずれあんだもお世話になりそうねと母が冗談

交じりに言っていたが、そんなのもっと先の話だろうと聞き流していた。

『お見合い成功率は百パーセント、離婚率はゼロパーセント。人間を見る目が確かな証拠だわ』
母が言うには、三船さんが取り持つ夫婦は結婚後も仲がよく、恋人同士のようにラブラブモード
だそう。ちなみにそういった現象を見合い恋愛と言わらしい。

実際のところ、彼女のお見合いおばさんとしての手腕はプロ級のようなのである。

それに、母が手放して誰かを褒めたり感心するなど滅多にないことだ。他人に対して愛想はいい
が、付き合いには慎重なタイプである。その母にそこまで言わせるとは、確かに三船さんは取り持
ち役として信頼の置ける人なのだ。

ようやく私は、今の状況を理解することができた。

おそらく母は、見合いの達人である三船さんに、あれこれ吹き込まれたのだろう。そうでなければ、
こんな夜遅くに見知らぬ独身男性のもとへいきなり娘を行かせるなんてするはずがない。

これが違和感の原因だったのだ。

言い方は悪いが、いくら信頼できる人とはいえ、こんなやり方は全くのだまし討ちである。

「俺はてつきり、織江がすべて承知で来てくれたんだと思って、天にも昇る気持ちになったんだけ
どなあ。どうしてお母さんは、だまし討ちみたいなのやり方で君を寄越したのかな」
咀嚼中の柿を吹き出しそうになった。

私の心を読んだかのようなセリフ。だが、これで少し緊張が解けた気もする。

「なあ、織江。どう思う」

織江、織江と、当然のごとく呼び捨てにする男性を、あらためて観察した。

活発で遠慮がなく、屈託のない朗らかさ。私の母はこういったタイプの人に好感を持つ。でも、
私はどちらかというと、物静かで優しい、穏やかな男性が好きである。母もそれは分かっているの
だろう。だから、とにかくいきなり会わせるという乱暴な方法を取ったのだ。

（勢いに押されて来たけれど、こんなのは絶対に困る。きちんとお断りさせていたごう）

ふと座卓の向こうから私をしげしげと見つめている彼と目が合い、どきんとする。けれどビ
ビッている場合ではない。私はもう二十四歳で、大人で、いっばしに仕事をしている社会人なんだ
から。

（いや、いっばしというのは言いすぎ……いやいや大丈夫、頑張れ織江！）

居住まいを直すと、まさにだまし討ちにあった経緯を順番に説明した。

それから、やんわりとだが、あなたのようなタイプは特に好みではないと伝えるのを忘れな
かった。

「……ふうん、そう」

正直なところを語った私に、浦島先生は鼻白んだ顔。

無理もない。ひと目惚れをした相手に、好みではないと返されたのだから。もっとも、彼の言っ
た『ひと目惚れ』を私は信じきれないのだけれど。

「すみません」

「……」

脂汗あせが再び滲にじんでくるが、言うべきことは言った。

柿も剥むいてあげて、一緒に食べた。話も聞いた。これでもう解放してくれるだろう、約束どおり。「そんなわけで、私は失礼させていただきます。あの、ごちそう様でした」

畳に指をつけて挨拶をし、そそくさと立ち上がる私を、彼は黙って目で追ってくる。すっきりその気になっている人を袖にするのは心苦しい。だがしかし、私にひと目惚めぼれするなど、ましてや嫁にしたいなんてことは、やはり信じられないのだ。

だって、白菜を前にぼーっとしてしているような女性を好きになるなんて、そんなこと有り得ない……っというか絶対に無い。

私はあの時、色、形、味ともに素晴らしいと評価された金賞の白菜に、美味おいしそうだなあ、鍋の材料に最高だなあと、よだれを垂らさんばかりに見惚みどれていただけだ。

そんな私が可愛いなんて、ばかげてるでしょ。

これでいいのだ。私はなにも間違っていないし、さっさと出て行けばこの話は終わりである。最初からなかったことに、なる。

急いそごう――

「ちよつと待て！」

座敷を出ようとして引き戸に指をかけたところに、大きな声が飛んだ。ただでさえ逃げ腰の私は縮ちぢみ上がる。

「は、い？」

そーつと振り返ると、彼は立ち上がっていた。

声にならない悲鳴を上げる。

その姿は、まさに仁王立ち。仁王様のように遅たぐましく大きな身体が、さらに膨ふくれ上がっているようだ。

「織江」

静かに呼びかけると、彼は座卓を回りこみ、のし、のしと、近付いてきた。

(逃げなきや)

本能で危険を察知したけれど、膝ががくがくと震えるばかりで動けない。

とんでもなく恐ろしい存在が目の前に迫っている。

「な、な、なにを……なにっ」

何をすることもりですかと言おうとしても、ちゃんとした言葉にならない。

男は目の前に立つと、私を閉じたままの引き戸に押し付け、顔を寄せてきた。洋画に出てくる俳優のような、精悍せいこんで整った顔立ち。好きな人は好きだろうが、私にはひどく危険で凶暴で、傲慢ごうまんな面構つらかまえに映っている。

「もうね、入会金と年会費を納めてもらってる」

「……え？」

視線を極限まで接近させて、彼はにこりと笑みを作る。が、目は全く笑っていない。

心の底から怖いと思った。

「君のお母さんに、代理人として申込書に印をいただいている。いかなる理由があろうと、一年間契約を解除することは出来ない。逃げることも能わずと明記されている」

「そつ、そんな」

そんな無茶な契約、あるわけが無い。通るわけは無い。無効だ、クーリングオフだ！
心で叫んでいるのに、ひとつも相手にぶつけれられない。私は浦島章太郎の瞳の中で、囚われの身になっている。どうして、どうして動けないの？

「木曜日の夜八時から十時まで、特別に稽古をつけてやる。お母さんは策士だな。俺、木曜日は比較的融通が利くんだ。三船さんから聞いたんだろうが、そこまで考えているなんて、実に素晴らしい。もつとも織江のためなら何曜日だろうが、無理にでも時間を作るがね」

母と三船さんによって罫に追い込まれ、さらにその中ではこの男が待っていた。

「だって、そんなこと、私は……あっ」

いきなり顎をつかまれ、顔を上げられた。ごつくて大きな手に固定され、視線を動かすこともできない。

「ナイフの使い方が上手だった。指遣いもきれいだった」

鼻先が触れ、息がかかる。

「や、やめてください」

最後まで言わず、唇を押し当ててきた。いや、かぶりつかれた。

「ん、んーっ」

(キス、私の、ファーストキス！)

鋼の腕に腰を拘束され、舌が侵入してきても逃れられない。

中学時代に、男の子と付き合った経験はある。近所の同級生で優しい子だった。こんなこと絶対にしない、謙虚で思いやりのある――

(こんな人、全然タイプじゃないっ！)

それなのに、どうして力が抜けていくの。

私、どうして逆らうのを止めてるの。

どうして、こんなに気持ちいい……の……

この家に、罫の中に足を踏み入れたのは私自身だどこかで分かっているから、逆らえない。

――いや、逆らわなかった。

浦島先生はゆっくりと唇を離したが、その後も名残惜しげに軽いキスを繰り返す。私はぼーっとしながら、柔らかな感触を彼と分け合った。

いい匂いがして、思考が麻痺したみたいに何も考えられない。

「好みでないなら、好みにさせてやる」

甘く蕩かすような、自信に満ちた囁き。

私はその声を遠くに聞きながら、分厚い胸板に痺れる身体を支えられていた。

駐車場まで私を見送りに出た浦島先生は、にこにこ嬉しそうにしている。ひとつも悪びれず、車に乗り込んだ私を見下ろしている。

「な、何もしないという約束は……」

ようやく頭が回りはじめた私の口から出たのは、なんとも力ない声だった。それに対して、先生は軽く答えた。

「あんなのは約束の内に入らない、ほんの自己紹介だよ」

当然といった態度に、もしかしたら自分がお子様過ぎるのだろうかと思えてきた。気力も萎え、それ以上何も言えない。

「木曜日には必ず来なさい。待つてるからな」

連絡が取れるようにと、スマートフォン番号とメールアドレスを交換させられた。これで個人的な繋がりが出てしまったと、気付いたのは少し後のこと。先生にとつて鈍い私を捕まえるのなんて容易なのだ。

私は車のエンジンをかけると、何が起こったのかよく把握できないまま会釈をしていた。

とりあえず、帰ることが出来て良かった。ハンドルを握りながら、心から安堵していた。私は無事に脱出したのだ。

そう、一時は取って食われるかと思ったのに、キスのひとつやふたつ、それだけで済んで助かつ

たと感謝しなければ……

感謝。

感謝？

感謝あ!?

誰に感謝をしろと!?

初めてだったのに。二十四年間、誰の唇に触れることもなく過ごしてきて、あんな——あんな貪り食らうようなディープキスを、あんな恐ろしい人に!!

だけど、真の問題は自分にあった。

あの家に足を踏み入れた時点で……

認めたくなくて、私は何も考えなくて済むよう夜道の運転に集中した。

「どうだった？ 明るくていい人でしょう、浦島章太郎先生。案ずるより生むがやすしでね、あれこれぐちゃぐちゃ説明するより、会わせちゃったほうが早いと思っただよ。気に入ったんでしょ、

織江」

放心状態で家に辿り着いたのは午後十一時過ぎ。母は起きて待っていた。私の赤い顔を見て目論見が大成功したと有頂天になっている。

「桃田町界隈でも評判の良い人でね、三船さんも太鼓判を押してるんだよ。あれだけハンサムで、甲斐性があったって、その上独身だなんて奇跡的でしょ。そんな男性が、彼氏もない、放つとけば一

生結婚できそうにない、ぼーつとしたあんたを気に入ってくれるなんて、本当にありがたいわよねえ。しかも茶華道の先生だなんて。お稽古に行けば花嫁修業とデートを兼ねられて、一石二鳥だわよ。お教室にはきちんと通いなさいね。お母さん、いくらでも協力したげるから、ねっ」

いつも手厳しい母親が、いやに優しく不気味だった。囲い込まれつつある。というか、すでに囲まれている気がする。頑丈な、鉄格子の檻に。

何も言う気にならず、くたくたの身体のまま自分の部屋に移動する。疲れたというより、骨を抜かれたようにとどろだつた。

明日は七時に出勤だ。お風呂なんてもういい、寝よう。火曜日、水曜日……木曜日。

かあーつと熱くなる頬を、手のひらで覆う。

(どうしちゃったんだろう、私！)

お出かけ用のワンピースから、微かな移り香。

逆らわなかったことよりも、気持ちいいなんて感じてしまった事実混乱した私は、ベッドに潜り込んで瞼をきつく閉じた。



短大卒業後に就職した会社は、業務用コーヒー豆やコーヒー器具、その他コーヒー関連商品の販売を行う、株式会社トモミ珈琲。東京に本社を置く企業で、私の勤務先は関東の南地域を担当する

富永支店だ。

富永支店は市街地に近く、通勤時間帯には周辺の道路が渋滞するので、私は朝七時に家を出なければならぬ。隣町にあるにもかかわらず、自宅から車で一時間もかかるのだ。

小さな会社や商店が連なる通りに立つ社屋は、倉庫、事務所、応接室や会議室などに分かれていて、私は二階の事務所で働いている。従業員は、支店長以下十名の男性営業部員と、二名の女性事務員という小さな職場だ。

そして、この女性比率の低さにもかかわらず、就職してからの四年間、私は誰とも噂にも何もなっていない。恋愛に積極的でないからというのもあるが、この私のぼーつとしたところが、血気盛んな営業マンには物足りなくて、食指が動かないのだろうと分析している。

同じ事務員の瀬戸加奈子さんは、七歳年上の既婚者だ。なんでも独身の頃は社内外問わずいろんな男性と付き合っ、一番いいのを旦那に選んだのだそうだ。美人な上に仕事も速く、きびきびしている彼女だからこそ成せた業だろう。

(男の人……か)

中学時代に付き合った彼は、特別だったのかなあとと思う。一緒にいるとほんわかとして、穏やかな時間が過ごせる人だった。そういえば、彼もぼーつとしたタイプだったかもしれない。

「野々宮さん、聞いてる？」

苛立った声にビクツとして顔を上げた。

「は、はいっ、すみません。ちよつとぼんやりして」

三十代半ばの中堅どころの営業マン、伊藤さんだった。仕事の出来る人で、富永支店では一番多くの店を担当している。

「しっかりとしてくれよ。さっきから話しかけてるのに」

「すみません」

何か考えていると、ついつい手元が留守になってしまう。パソコンで見積書を作成していたのだが、その作業も止まっていた。

「カフェ・フォレストさんの納品書、まだ？」

「はいっ、ただいますぐ」

カフェ・フォレストは街の一等地であり、グルメ系はもちろん、ファッション雑誌にも度々取り上げられるお洒落なカフェ・レストランだ。富永支店とは付き合いが長く、開業以来二十余年にわたり変わらぬ愛顧を受けている。

そちらには主にコーヒーの生豆を納めているのだが、他にトモミ珈琲オリジナルのコーヒー器具も置いてもらっている。今朝方まとまった数の注文が入ったので、伊藤さんが納品の準備をしていたのだ。

「発注の電話を受けたのは君だろ。大丈夫？」

「は、はあ」

いつもはファックスか電子メールで注文が入るのだが、お客様はよほど急いでいたのか、今回はめずらしく電話だった。手書きのメモが電話機の横に残っている。

(トモミ珈琲オリジナルドリップセットを、数量は十五で、と)

急いでキーボードを操作して納品書を仕上げ、専用伝票にプリントアウトして伊藤さんに渡した。伊藤さんの担当は本来は加奈子さんのだが、彼女は今日、子供の授業参観日で午前中お休みだった。

「数量単価ともにOK。よし、それじゃあ行って来ます」

納品の時間が迫っているのか、伊藤さんは小走りで事務所を出て行った。

「うおっほん。野々宮さん、ちよっと」

営業マンがすべて出払った静かな事務所に、支店長の咳払いが響く。私の仕事振りに不満がある時の合図だ。おずおずと席を立ち、支店長の前へ進み出る。彼は私の父親と同じくらいの年齢で、一見神経質で厳しそうだが、実際は面倒見の良い優しい人だ。彼はデスクを指でトントン叩きながら小言をひとつふたつ言う。それから、困ったような諦めたような、複雑なため息を吐いた。

「なんていうのかな、野々宮さんはこう……仕事が出来ないわけじゃない。電話の対応にしろ、データ類の管理にしろ、瀬戸さんよりも丁寧なくらいだ。だが、時折集中が途切れてぼんやりしてしまう。あと、自信の無さというのが顔や姿勢に表れてしまってるんだな。バックアップを期待する営業マンからすると、かなり頼りない」

「はあ」

自信の無さ、というのは当たっている。私は、子供の頃からずっと自信が無い。

「ほら、猫背」

「あ、はい」

背中が曲がっているといつも指摘されるのだが、なかなか直らない。普段からうつむき加減になっているせいだろうか。

「もつと堂々として、自信を持って仕事するようにね。まずは形から入り、根気よく経験を積めば、結果は後からついてくるものだ」

それはつまり、背筋を伸ばして胸を張れ、ということだろうか。

「はい、分かりました」

「うむ、頑張って仕事するように」

理屈は分かる。でも具体的にどうすればいいのかは見当もつかない。堂々として自信を持つたなんて、私には一生無理な気がする。

ふと、浦島先生の姿が頭に浮かんだ。昨夜見た彼の姿勢は、茶華道さかかどうの先生だけあって、しゃんとしてまっすぐに立派に見えた。立ち居振る舞いも堂々としていた。

好き嫌いとはかくとして、私に対する態度も自信に満ちあふれ、一分すまの隙も見当たらなかった。昨夜のことを思い出すうち、唇に熱い感触がよみがえりそうになって、激しく首を横に振った。

（あの人は私と違いすぎる。いくら契約解除が不可能と言っても、無理なものは無理なもの。浦島先生の教室に通うのも、お見合いも、全部無理！）

支店長が怪訝けげんな眼差しまなざしを向けてくるが、知らぬふりをして自分の仕事に戻った。

その日の午後。

昼休憩中に出社してきた加奈子さんと事務所でお茶を飲んでみると、勢いよくドアを開けて伊藤さんが入ってきた。ズカズカと一直線に近づいて来て、手にしている伝票を私の前に放り投げた。

「……あの？」

「電話を受けたメモと突き合わせてみて」

明らかに怒った表情である。

「穏やかでないわねえ伊藤さん、どうしたのよ一体」

加奈子さんがなだめるが、伊藤さんは苛々いらいらがおさまらない様子で、私を見下ろしている。

嫌な予感がしつつ、電話機の横に残っているメモと納品書を見比べてみた。メモには、トモミ珈琲オリジナルドリップセット・数量十五・トウキと記してある。

「あっ。と、陶器……」

私が伊藤さんに伝えたのは、ポリプロピレンとガラス製ドリップセットの製品番号だった。普段から、そちらのほうが多く出荷されているので、思い込みで伝えてしまったのだ。

「あちゃー、しかも、カフェ・フォレストさんかあ。我が支店の大得意さんだわ」

加奈子さんの言葉と、やつちやつたわねというジェスチャーに、一気に血の気が引いていく。

「俺が納品した時、店長の峰みねさんも注文主のお客さんもお客さんもお待ちかねだった。それなのに、いざ蓋ふたを開けたら違うものが出てくるだろ？ お客さんにはがっかりされるし、店長には恥をかかせてしまった」

たらたらと冷や汗が垂れてくる。どうして、どうして私はこうなのだろうと後悔してももう遅い。まさに、やってしまったのだ。

「それでは、急いで在庫を確認して、不足の場合は本社に連絡して取り寄せることに……」

「もう手は打った。自分でやったほうが確実だし、早いからね」

伊藤さんは私の発言を遮り、あとは加奈子さんに任せると言って、それからこうも付け加えた。

「平謝りに謝って何とか許してはもらえたが、会社の信用はがた落ちだ。それと、フォレストの店長さんが、電話を受けた方は新人さんでしたか、やはりベテランの事務員さんに代わってもらえばよかったですねと残念がっていたよ。俺は恥ずかしくて、野々宮さんのことを入社四年目の社員ですとは言えなかった」

私も、穴があつたら入りたいほど恥ずかしく、情けなかった。

「とにかく、フォレストさんから電話は瀬戸さんが受けてくれ。不在の時は俺に回すように頼むよ」

伊藤さんは段々と落ち着いてきたが、それでもなお君には何の期待もしないという口調だった。得意先が大口でも小口でも、ミスがあつてはならないのは当然だ。

だが今回のように、長年信用を培ってきたお客様に対する失敗は、いつものミスの何十倍ものショックを私に与えていた。

もう二十四歳で、いっぱしの社会人のはずなのに、どうしてこうなってしまうのだろう。

支店長が頭を抱えたのが目の端に映った。何度指摘されても直らない集中力の無さが情けなくて、

涙が出そうになる。

激しく落ち込むとともに、どうかかしくなくてはいけないと深刻に悩み始めていた。

水曜日の夜。

仕事から帰ると、母が玄関先にばたばた走り出て来て、私の腕をむんずと引っつかんだ。真剣な目つきの笑顔が、かなり怖い。

「な、なに……」

「道具を買って来たわよ。早く来なさい」

そういえば今朝、街のデパートで茶華道に必要な道具を全部揃えてくると言っていた気がする。

昨夜は落ち込むあまりなかなか眠れなかったので、いつも増してぼーっとしていた。返事をした覚えも無いのだが、母は私の態度など気にもせず、買ってきてしまったのだ。

「ちよつともう、歩きにくいよ」

廊下を引きずられて居間に辿り着くと、姉がソファに腰掛けていた。

「あれっ、お姉ちゃん」

「久しぶりね、織江」

同じ両親の血を分けたとは思えない美貌を持つ姉が微笑んだ。お盆に夫婦で帰省して以来の対面だった。

仲良しとは言いきれない姉妹だが、久しぶりに会えば何となく嬉しい。私は前のめりになってい

る母ではなく、姉の隣に腰掛けた。

「お姉ちゃん、どうしたの、急に」

「うん、友達に会いに近くまで来たから、ついでに寄ってみたの」

「ふうん、あ、和樹さんは元気？」

「元気よ。でも、新規の仕事が大掛かりらしくて、これからめちゃくちゃ忙しいみたい」

「そうなんだ。大変だねえ」

姉の夫であるエリート商社マンの和樹さん。姉も美形だが、彼もスタイリッシュなイケメンで、初めて会った時はモデルか俳優さんかと思っただけだ。

「たまには実家にも顔を出しなさいよ。いくら夫婦円満だからといって、他の家族のことも忘れな
いで。ところで、赤ちゃんのほうはどうなの？」

毎度の質問に姉は苦笑する。しばらくは二人きりで生活すると何度も言っているのに、母は聞き
入れないのだ。

「分かってますって。最近は和樹さんとも相談してるから」

「ほんとに？」

娘を嫁に出したら、今度は孫を抱きたくて仕方ないらしい。昔から母親の期待には、もれなく応
えてきた姉である。本当に考え始めているのかもしれない。

「それより織江、お茶とお花を習うんですって？」

「うっ、それは……」

「そうそう、そうなのよ、明日からね」

再び前のめりになった母が代わりに返事をする。そしてデパートの紙袋から茶華道ちかどうに使う道具を
取り出し、テーブルの上にずらりと並べた。

「うわあ、本格的じゃない」

「お店の人に聞いて、できるだけ高級なものを選んで来たからね。浦島先生もびっくりするわよ」

いきなり出てきた名前にどきーんとするが、平静を装う。勘の鋭い姉の前で動揺を見せては余計
な詮索せんさくをされてしまう。

「私の友人にも茶道教室に通ってる子が何人かいるけど、話を聞くと、かなり奥が深そうだよ」

「そ、そうなの？」

「まねごとで少し教えてもらったんだけど、確かね、こんな感じに」

姉は小さめのハンカチみたいな赤い布を取り上げると、サツサツと、よく分からない動作をして
から器用に折りたたみ、竹製の耳かきのような棒をその上にかけて、鷹揚たかような動きで拭う仕草をした。

「この布は服紗ふくさで、こっちの細長いスプーンみたいなのは、お抹茶おまっちゃを掬すくう茶杓ちやくという道具よ」

「……へえ」

今姉が行ったのは、服紗ふくさという布で茶杓ちやくを拭ったというただそれだけのことだ。しかも、まねご
とでいどに覚えている素人技で。それなのに何となく美しいと感じた。

——なるほど奥が深そうだ。

私はコーヒーを淹いれるための道具を頭に思い描いてみた。豆まめを挽くミルやドリップ用のサーバー

などいろいろある。それらと似た役割のものがお茶にもあるのだろう。

でも、機能的に作られたコーヒー器具と比べると、お茶の道具は何か違って感じるように感じる。たとえば、この茶杓は姉が言うとおりのコーヒーにおけるスプーンにあたると思うけれど、服紗は道具を拭う布というだけでは無く、別の意味も持つているように思う。

そうでなければ、美しいと感じるはずはない。

「これも受け売りなんだけど、亭主が点てたお茶を客がいただく、その一連の動作ひとつひとつに意味があり、そして無駄がないの。正式な茶会である茶事ともなれば、炉に炭をつぐところから、懐石、濃茶、薄茶といったかしら、とにかくたくさんさんのきまりごとや所作があるんですって。それを自然体になるまで覚えようとしたら、これはもう、大変な修業よね」

何も言えない私をよそに、母が口をはさんだ。

「そうよ。ほら、浦島先生はその点、お祖父様やお父様が茶道の師範でいらして、幼い頃よりそのお二人について修業していらつしやるのだから、相当に立派な方なんだよねえ」

細かいところはよく分からないというニュアンスだが、三船さんから浦島家についてあれこれ聞き出しているのだろう。そもそも、母は「先生」と呼ばれる人種に弱く、無条件で一目置いてしまうタイプだ。しかも三代続けて「師範」の肩書きがつくととなると、母からすれば彼らは殿上人かもしれない。

「私にできるのかな」

何も考えず、ぼつりともれた問いだった。

姉と母は顔を見合わせ、同時に首を捻る。なんて正直すぎる反応。がっかりしつつも、自分でもなぜそんなことを言ってしまったのか不思議だった。

「あー、でも、素質はあるかもしれない」

「えっ、そうかい？」

姉の希望的観測に、母は本気で驚いている。強制的に入門させておいて、無責任な人である。

「織江って、意外に手先が器用じゃない。それに、小さい頃から正座を苦にしないでしょ」

「そう言われればそうだねえ。法事の時なんか、陽子のほうが足を崩すのが早かったっけ」

正座が得意でこれまで得たことは無かったけれど、茶道では役に立つのだろうか。

「いいんじゃないの。案外いけるかもしれない。勉強もスポーツもいまいちだけど、根気よく続けられ、思わぬところで芽が出るかも」

これまた傷付く言い方だ。だが、私はふと支店長の言葉を思い出していた。

『まずは形から入り、根気よく経験を積み、結果はあとからついてくるものだ』

なんだか、母と同じく前のめりになってくる私。

茶道、華道、未知の世界――

「それに、猫背も直るかもしれないねえ。三船さんも言ってたけど、茶道を始めてから背筋が伸びて、胃も丈夫になったとか」

「それは素敵ね。確かに織江の猫背はみっともないもの」

ずきつとくるけど本当のことだ。支店長にも度々注意されている。

私はテーブルいっぱいには並べられた茶華道の道具を見回しながら、明日は約束とおりちよつとだけ教室を覗いてみようかなと考える。

そして、母の台詞に影響されてか、その時だけ浦島先生のイメージが美化されていた。

「野々宮さん、電話だよ。浦島さんって方から」

木曜日の昼休み。

久しぶりに加奈子さんと外食することになり、ちよつと事務所を出ようとした時だった。

「うらしま……さん？」

背後からがっしりと羽交い締めになれた感覚だった。身体がかちこちに固まり、動けなくなる。

「織江ちゃん、下で待つてるね」

加奈子さんにぎこちなく頷いてから、自分のデスクの電話機に回してもらい、恐る恐る手を伸ばす。

昼休みが始まるのを狙いましたような絶妙のタイミングに、私は混乱した。電話に出られない理由を捻り出そうとしても空しい抵抗である。

（なぜ私の会社や電話番号を知ってるの？）

——母が教えたに違いない。

（それより、どうしてスマホではなく職場にかけてくるの？）

——それはもちろん、こうして呼び出されれば無視できないから。

自問自答し、脱力する。彼が策士なのは初対面の言動で理解していたことだ。

一体何の用事だろう。全身で警戒しながら電話に出る。

「もしもし、野々宮です」

『こんにちは、織江。浦島章太郎だ』

はきはきとした声が耳に飛び込んできた。

『ちゃんと聞いているか？』

「う……聞いています」

電話を取り次いでくれた社員や、デスクで弁当を食べている支店長が、不思議そうに私を眺めている。

先生の声は大きくて、呼び捨てにしているのが周りにも丸聞こえだ。何かと思うのだろう。とりあえず、なるべく早く切り上げられるよう対応することにした。

「ご用件をうかがいます。あの、できるだけ手短にお願います」

『ああ、昼飯時に悪いね。この前はいいものをありがとう。お母上には、よしなに伝えてくれたかな』

富有柿のことだ。よほど嬉しかったのだろう、ずいぶん浮き立った調子である。

だが、それは挨拶代わりだった。

『ところで、今日は木曜日だ。忘れてるといけないから電話したよ』

「は、はあ？」

(忘れる？ 忘れられたらどんなにいいか。あの夜以来、あなたを忘れた日はありません。むろん、悩みの種として)

とはいえ、口に出せるわけもなく、抑えた声で冷静に返事をする。

「忘れていません。ちゃんとお稽古の道具も用意してあります」

『ほう、感心だな』

母からお茶とお花に必要な道具一式、プレゼントされているのだ。しかもかかった金額は半端ではなく、ひとつひとつの値段を聞いて驚いてしまった。

自分の預金から出すとしたら絶対に躊躇するだろう。

『ま、道具なんてものは俺が貸してもいいし、手ぶらでも構わんがね』

「えっ、そうなんですか」

『ああ、ウチにあるものを気軽に使えばいいよ』

思わぬ言葉に、ほんの少し警戒心が緩んだ。気を遣わせないように言ってくれているのだろうか。何千円、何万円もする道具を気軽にだなんて。

この人は案外親切で、太っ腹なのかもしれない。もしかしたら、この電話も純粋に心配してかけてくれたのかなど、好意的な解釈をしかけたほど。

だが――

『君の身体さえ来てくれたら、ね』

「……なっ」

ふっふふふと、含み笑いが耳の奥まで侵入し、ぞわぞわと内側から犯される錯覚に陥った。支店長たちが目の前にいなければ、悲鳴を上げて受話器を叩きつけるところだった。私はふらふらしながらも、なんとか平静を装う。

「と、とにかく、今夜八時にお伺いします……それと、これからは職場ではなく、携帯のほうへかけていただくように、お願いします」

『了解。それじゃ、楽しみに待ってるよ、織江』

潔く、いや、一方的に通話は切れた。

(なんて人なの、なんて……うううううっ)

「大丈夫？」

いつの間にかそばに来て見守っていた支店長の声に、はっと我に返る。受話器を握りしめたまま、直立不動の状態だった。

「いえ、はい、平気です！ なんでもないんです……って、あ、あの、昼休憩に行ってきます」

動揺もあらわに事務所を飛び出した。鏡を見なくとも分かる。私は今、どこもかしこも真っ赤になっっている。

カラダは、正直だ。

午後七時四十五分。浦島茶華道教室の駐車場に到着した。

何度かハンドルを切り返ししながら、この前の夜と同じ一番手前の隅っこに駐車した。

他に乗用車は一台も無い。この前とめてあったのは、生徒さんの車だろう。ということ、今夜はやはり私一人きりなのか。

稽古道具一式を収めたトートバッグを肩にかけ、深呼吸をする。それでも胸がばくばくするが、足は自然と歩み始める。私は、自分のこの行動に不可解な気持ちになりながらも、止まることなく進んでいる。

どちらかといえば小心な私なのに、初めて会った女性に強引にキスをするようなあの、恐ろしい仁王様のような浦島先生のもとへと、自ら飛び込もうとしている。

彼は怖いし、とんでもない人だと思う。それは間違いない。

でも、今の自分のままでは駄目だという、かつてない焦りに突き動かされている。

だが呼び鈴を押しそうとして、さすがに躊躇する。

二時間も二人きりになるのを知っていながらここまで来たことに、今さらだが気付いたのだ。この後におよんで、初めて自分を責めた。ちよつとだけ覗くなんて、あの人相手では無理な話なのだ。がつつり拘束されるに決まっている。

母が三船さんから聞いた話によると、先生のご両親は現在仕事の関係でアメリカ合衆国のワシントン州シアトルに住んでいる。移住したのは先生が高校生の頃だそう。

残された先生は茶道の師匠でもある祖父と暮らしていたが、今年の春に他界されてしまい、今は一人暮らしだそう。

だからこの家には彼の他には誰もおらず、足を踏み入れたが最後本当に二人きりになるのだ。そ

れなのに来てしまった。

(もしかしたら、私は……)

「待っていたよ、織江」

いきなり玄関の引き戸が開き、本人が現れた。あまりにも唐突で逃げることも出来ない。

「あ……わた、わたしっ」

「うん、よく来た。こんばんは、いい夜だね」

挨拶も返せず、しどろもどろになった私に、先生は上体を屈めて覗き込むようにした。

着物の胸元から、この前の夜と同じように、微かな香りが漂ってくる。月曜日、私のワンピースに移り香がほのかに残っていた。スーッとするような、甘いような、うっとりする独特の匂い。

「さあ、入りなさい。それはこっちに寄越して」

「あっ」

ぱつと手首をつかまれ、ぎよつとして隙にトートバッグを取り上げられる。

「中身は、お稽古用の道具、だろ。先生が検査してやる」

「でも……きやっ」

引つ張られるようにして玄関に上がると、手を繋がれたまま廊下から入ってすぐの部屋に連れて行かれた。離せば私が逃げるとでもいわんばかりの態度である。

「茶室は奥だが、まあ今日は居間でいいだろう。座って」

「は、は」

促うながされるまま、敷ふいてある座布団に正座した。浦島先生は私と向かい合わせになる格好かつこうで、畳の上に座った。

十二畳の部屋には、中型の液晶テレビが据すえられた木製ラックと、あとは座椅子が二台あるだけだ。しかも座椅子は隅の方に押しやられている。

この部屋も仏間と同じく片付けられて清浄せいじようだが、余計なものが無いぶん生活感も薄く、居間らしからぬ印象だった。

二人でしばしそのまま向き合い、無言になる。

先生の心の底まで見透かすような眼差まなざしを受けながら、私も彼の瞳に映った自分を見つめていた。屋敷全体が静かで、時計の秒針がコチコチと動く音だけが聞こえる。

私から何か言うべきだろうかと思つたが、沈黙を破つたのは先生だった。

「さて、織江。今夜から君は俺の弟子になるわけだ。それも、木曜日にただ一人、個人稽古まなの愛弟子まなにね」

少し気になる言い方だが、習うとなるとそれはそのとおりだ。

浦島先生が目の前にいるというのに、私は自分でも驚くほど落ち着いている。不思議で未知なる気持ちだった。

私は座布団を外すと、居住まいを正してから先生に挨拶をした。

「野々宮織江と申します。お茶とお花の稽古に参りました。よろしくお願いします」

「はい、私は浦島章太郎です。頑張ってくださいね」

先生も座り直すとあらたまつて挨拶を返してくれた。言葉遣いや態度が急に先生らしくなつたので、ちよつと意外な気持ちになる。

すると彼は少し考えるそぶりをしてから、帯に差している扇子を抜いて私に手渡した。「これは？」

普通に受け取つてはみたものの、どういう意味があるのか分からなくて首を傾かしげた。

「茶扇ちやせんといつて、茶席で使う扇子だよ。それを膝の前に置いて。こう、横向きに」

手をとられて戸惑うが、先生が真面目な顔つきなので、言うとおりにする。

「こう、ですか？」

「そう、そして礼、つまりお辞儀じぎをする。やってみなさい」

「はい」

私は頭を深く下げたが、こんなふうにお辞儀をするなんて普段に無いことなので、自分でも不格好な感じがした。

「うん、稽古の始めと終わりには、きちんと挨拶することだ。扇子は、結界を表す」

「結界……」

先生は真面目な顔のまま頷うなずく。

「稽古の間は、俺は君と師匠と弟子の関係でいるよう、けじめをつける。そのところは、厳しく分けるぞ」

言葉どおり、いつの間にか厳しい雰囲気になつている。突然の切り替えに合わせられない私は、

どう反応すればいいのかわからない。

先生はおろおろする私から扇子を取り上げると元どおり帯に差した。それからじつと私を見て、困ったように肩をすくめた。

「まあ、この前の夜は俺も必死だったから、やり過ぎたかな、とは思っている」
「え……あつ」

私を捕まえて、強引にキスをしたことだ。

膝に目を落とし、もじもじした。あの光景と感触をクリアに思い出してしまい、頬が火照^{ほて}つて、正面から先生を見ることができない。

「半ば無理やり弟子入りするように話を持っていったからね。実は心配してたんだよ、今日はちゃんと来てくれるかなあつて」

予想もしない発言に、思わず顔を上げる。

背筋をピンと伸ばして正座をする先生だが、扇子をおさめた途端リラックスした笑顔になっている。なんとも鮮^{あざ}やかな切り替えだった。

「でも俺は後悔してない。こうして君も来てくれたことだし、かえって自信が付いたな」

「ええっ？」

自信だなんて、それはどういう意味ですかと焦^{あせ}る私に対し、彼は膝を詰めてきた。

二人の間に扇子は無い。じりじりとにじり寄る彼に、私はばくばくと口を開けたり閉めたり、声にならない抗議をする。当然通じるわけもなく、あつという間に追い詰められる。

「稽古は稽古、これはこれ。普段は男と女として、俺と付き合ってくれないか、織江」

「あつ、あの、でも私は」

「脈があると思うけどね、違うのか」

どくんどくと全身の血が勢いよく巡り始める。大きく大きく脈打っている。もう、誤魔化^{ごまか}しは利^きかない。彼にも、私自身にも。

「は……い」

「ん？ もつとはつきりと」

濁りのない薄茶色^{うすちや}の瞳に、吸い込まれそうになる。

着物から匂い立つ独特の香りに、気が遠くなつていく。

私と全然違う人。

だからこそ、私はまたここに来てしまったのだ。

「はい——お付き合います。私、先生と」

「男と女として？」

「はい」

明確な返事に、先生が目を見開き、全身を震わせたのが分かった。

「織江」

「でも、でも、お稽古は……」

感激の震えを目の当たりにした私は怖^{おそ}気^け付いて彼の気をそらそうとするが、今の先生に通じるわ

けも無い。覆い被さるように抱き締められる。私は正座したままのけ反り、後ろに両手をついた。着物越しに伝わってくる温もりと、香りが私を包み込む。

「タイプじゃないって言ったのに、どうしてそんな目で見る？ どこで気が変わった？ 俺のキス、そんなに気持ちよかった？」

初めて会った日のことを責めるような立て続けの質問に、私は曖昧に首を振った。

自分が自分でも分からなかった。本当にタイプじゃないはずなのに、なぜ惹かれるのか。

「……俺好みに仕上げたい」

「え」

答えられないでいると先生は突然身体を起こし、私のことも両手で支えてまっすぐに座らせた。香りが薄まって、くらくらしながらも懸命に気を取り直す。

「今の君じゃ俺は満足しない。道具というのは、使い込んでこそ味わいが増すもんだ」

「つ、つかい、こむ？」

「師匠と弟子として、男と女として俺と付き合えばいずれ分かってくるよ」

ぽかんとする私に、先生は嬉しくて堪らないというように笑う。どういう意味だろう？

「とにかく、スタートだ」

先生は笑いを収めると、稽古道具が入れている私のトートバッグを二人の間に置いて、口を広げた。

「見てもいいか」

「あつ、はい。お願いします」

これから道具の検査をするのだ。先生はいつの間にか「先生」に戻っている。

お花に使う数種類の銚や剣山、お茶の服紗、懐に入れるという懐紙の束などを、ひとつひとつ手に取り吟味していく。

すべて見終わると、小さな呟きがきこえた。

「ふうむ……」

「あの……なにか？」

「ん、いや、どれもこれもビギナーには過ぎたる贅沢品だなんて思ってね。お母上のお見立てかい」

「はい……いえ、見立てたというか、茶華道の知識がないから、とにかく専門店のすすめる値段の高い道具を揃えてきたのだ、と言っていました」

「そうか。確かにものはいい。うーん、だが剣山はうちにあるのを使えばいいし、剪定銚も当分は不要だなあ」

何も言えずにしていると、先生は取り出したものを丁寧にバッグに仕舞い、私に返した。

「これからは、道具は自分で選びなさい。今必要なものは何なのかよく考えて。懐紙一枚、人任せにはしないで」

「は……」

今更ながら恥ずかしかった。

茶華道を習うのに何の予備知識も持たず、言われるまま流されるまま、渡された道具の使い道す

ら確かめもせずに来たなんて。どうしてこんなに人任せなのだろう。これだから母も心配するのだ。結婚どころか彼氏もできないのではとやきもきされても仕方ない。

さらにそのことを指摘されるまで気付かないなんて、あまりにも鈍すぎる。

「先生は明るく笑い、うつむいている私にすべてお見通しとばかりに言ったのだ。」

「そんな織江だから、俺は惚れたんだだけだね」

夜のしじまに優しく響く、畏縮した私の心を和らげる素朴な告白。

「先生……」

怖いと思っていたはずの、大きくて、力が強くて、強引な人。それなのに、今は私を大らかに受け止めてくれる頼もしい人だと感じている。

単純すぎるだろうか。

なぜだか、もうひとつ奥にある彼の気持ちを確かめたくなかった。

「でも、今の私では満足しないって」

先生はもう一度朗らかに笑った。私はじつと見上げて答えを待つ。

「だから言っただろう。俺好みになるように使い込むって」

「使い込む？」

「まったく、困った娘だね」

先生は立ち上がると隣の部屋に移動し、じきに戻ってきた。私の前に正座すると、手にしているものを渡してしっかりと握らせた。

先生が帯に差しているものよりも小ぶりの扇子だった。

「女性用の扇子だよ。これは道具の中に入ってなかっただろう。用意しておいて正確だったな」

「あ、ありがとうございます」

稽古のための道具選びを母にすべて任せきりだった私。そんな私のために、先生はわざわざ用意してくれたのだ。こんな私のことを、受け入れてくれるのだ。

なぜこんなによくしてくれるのか不思議だけれど、とても嬉しくて感動してしまふ。一生懸命に茶華道の修業をして、先生も満足するようになしつかりした自分になりたいと心から願う。

真新しい扇子を膝の前に置き、始まりの挨拶をした。

「よろしく願います」

「よし、やろうか。俺のもとに来たからには稽古もその後も、徹底的に仕込んでやるからな！」

先生と私は師と弟子になり、見つめ合った。

でも私は「稽古もその後も」という言葉をよく理解していなかったのだ。もっと言うなら、俺好みになるように使い込む」という宣言すら、深く考えていなかったのだ。

ここに来る前、あんなことを言われていたのに。

——君の身体さえ来てくれたら、ね。

それを思い知ったのは、初めての稽古が終わった後だった。

「まあ、初日はこんなものだね。来週からは少しずつ実践していこう」